

Title	河上肇著 唯物史観研究
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.10 (1921. 10) ,p.1408(148)- 1412(152)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0148">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0148</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

意義内容を批判せんとするものである。

今著者其人の語る處を極めて概括的に考察するに、廣義に於ける社會主義が直接間接總ての國民の興味を惹起するが如き世界的意義を有するに至つたことは主として近代人が「全體」其者を重要視する中世主義より遠ざかつて現實主義の末に没頭するに至つたことである、換言すれば社會組織の統一的方面を無視し尊重せざりし結果茲に不安動搖の時代を齎らし、殊に此不安動搖時代の特徵が自我の物的享樂的方面に存することが著しく富の集積を必要とする結果、自から經濟上に於ける一大變動を來たし、一面には富の集積を齎らすと共に他の一面には富なき無産者階級の出現となり、而して社會主義は後者の文化的要求として殊に其存在を價值付けらるゝに至つたのである、尙ほオイケン教授は社會主義其者を六つの方面より觀察して同主義は何れの點に於ても有力な問題に觸れてゐるが、然し人生問題としては何れの點より見るも未だ充分に解決せられないと共に其所論は餘りに偏

篇を包含する。

唯物史觀の意義を誤解したり、或ひは哲學上の唯物論と混交して唯物史觀を攻撃する者の多い今日、此の研究に於ける我が學界の權威たる博士がマルクスの眞意を明快に紹介せらるゝことは素より學界に益すること極めて大なるものがあらう。又必要なことでもあらう。然し吾人の聞かんと欲するところは博士の是に對する批判である。

唯物史觀が必然論であるか如何か、又それが徹底すれば論理上一種の宿命主義とならないか如何かは、唯物史觀を攻撃する者の一つの論點となる。而して博士が云ふが如く、マルクスの唯物史觀中其の重要なものは人類の精神的文化に關する經濟的説明よりも、寧ろ社會組織の經濟的説明にある。(一七頁)即ち是は「更に二の部分から成り立つ。其の一は、社會の生産力と社會組織との間には密接不離の關係があるといふ事を主張したもので、其の二は、社會の生産力の變動に伴うて社會組織も亦必然的に變動すべ

狭く餘りに概括的で、餘りに黨派的で隨つて人間性の本質を誤解して單に吾人の生活の或方面に向つて其解答を與へしに過ぎずとなし、最後に著者はオスワルト、スペングラーと同じく義務と全體主義との必要を提唱するのである。想ふに哲學的宗教的要求の漸次旺んならんとする我邦に於て本著の如きは何人も一讀するの價値ありと信するものである。(阿部生)

河上肇著「唯物史觀研究」

題版三三六頁  
定價貳圓八拾錢  
弘文堂發行

本書は博士が大正八年以後に書かれた唯物史觀に關する論文及び翻譯の大部分である。上篇は研究と題し、マルクスの唯物史觀に對する周到なる考證七篇よりなり、下篇は翻譯として、ボルハルト、ブーディン、グンテール、シュタウディンガー、エンゲルス等の唯物史觀に關する譯文五

篇を包含する。さものたといふ事を道破したものである。(一八一頁)斯くして唯物史觀の必然論たることは疑を容れない。故に若し社會組織の變遷が全然自然科學的因果關係を以つて律せらるゝならば、シュタムラーの云ふ如く「因果上必然的なる結果を促進せんとする願望は、一個の無用なるノンセンスを包含する。」博士は此の點に關する疑惑を一掃せんとかなり努力されて居るやうである。例へば「唯物史觀と必然論」「唯物史觀の要領」の大部分はそれである。然し其の前者に於ける論法の如き、スミス然りマルサス又必然論、マルクス獨り必然論であるのではないと云ふが如きは、論述の興味多きに比して説明さるゝところ僅少である。博士は云ふ「私の見る所によれば、……唯物史觀は、明かに一種の必然論であるが、其の必然論には、實は之が前提として、矢張り人間性に關する一定の獨斷があると思ふ。」(九〇頁)「マルクスも亦、人間性に關する或る觀察を前提として、一種の必然論たる唯物史觀を立てた。……しかるに必然論は常に

放任論を生む。だから資本主義の崩壊並に社會主義の實現に對しては、マルクスは實に極端なる放任論者であると謂ふことが出来る。」(九三頁)「今日多くの學者は、それが必然論に立脚する故を以て獨りマルクスを責むるけれども、尙に古今を通覽するに、個人主義經濟學の創設者たり完成者たるスミスもマルサスも、また等しく一種の必然論の上に其の科學の根柢を置いてゐる。而かも因果の必然論を爲すに於て始めて科學あることを思は、此の如きは事理の當然、必ずしも怪むを要せざることであらう。」(九四頁)然し是では必然論の意義極めて不明瞭である。屢々一種の必然論なる言葉を使用されるが、如何なる必然論と雖も、其の前提に依つて多くの種類は生ずるだらうが、すべて必然性を有すると云ふ點に於いては幾種類もある譯ではない。而してこゝに問題となるのは前提ではない。必然性其のものである。且つこゝにマルクスは放任論者であるといふは居るが、直ぐ其には如何なる必然性も有して居ないのか。マルクスの議論に於ける必然性はグンテルの云ふ機械的の動因と變生的の動因とを共に包含して居るとすれば、是等の區別を追求することに依つて、機械的必然性とは全く別個の必然性を發見し得ないだらうか。而して其の非機械的必然性の人類の歴史に於ける向上が「生産力の發展は社會組織進化の原因といふよりも、寧ろ其の條件となる」のではないだらうか。(一九〇頁)此の必然性に關する問題は、前述の如く本書に於いて諸所に論せられてあるにも拘らず、余が讀過の際問題外に言及すること多くして、不滿に感じた點である。尙ほ社會組織の發展變化の起源を一元論的に解釋せんとする問題に就いても論すべき餘地があるやうに思ふ。是等の點に就いては博士が唯「隨筆だといふ理由で」(序)本書に採録されなかつた「人道的理想と自然的法則との背反及び偕調」其の他の論文に於いて寧ろ多少是を知り得るやうに思ふ。蓋し博士自身も云はるゝ如く「本書の内容はマルクスの史觀の

ら、資本主義の崩壊を擁護せんとする無用有害の一切の計畫、並に社會主義の實現を妨害せんとする無益無謀の一切の運動に對して、極力反抗し抗争することを辭しなかつたものである。」と述べられて居る。その點に關してと云ふ言葉が明瞭ではないが、恐らく其の意味は終局に於いて資本主義が崩壊し、社會主義が實現することは必然であると云ふことであらう。それは博士が他の場所でマルクスの思想が無爲拱手論たることに答へて擧げられた例に依つて明かである。出産と云ふことは必然である。然し「出産時に於ける各種の準備に心をこそ配れ、決して無爲拱手に終るべき筈は無い」。死と云ふことは必然である。然し自殺する者もあり、謀殺されることもあり、「人は是がため決して死に對し無爲拱手に終るべき筈はない」。(七五頁)之に依つて見ても其の必然論がすべての其の因果系列に於いて自然科學的必然性を有するものでないことを示すものである。其の結局に於ける必然性のみである。然し、社會主義の實現に關するものか、解説か又は之に關する他人の意見の紹介かに止まり、その史觀の修正は勿論、之が非難も將た辯護も私は本書に於て殆ど之を試むる所がなかつた。(序)従つて博士自身の判断を求むる方が間違つて居る。故に上に述べた點に就いても敢て論議すべきでなかつたかも知れない。然し唯本書が唯物史觀の研究書として本邦に於ける隨一のものたることを江湖に推奨するに當つて、敢て其の感想の一端を述べたに止まる。

(野村兼太郎)

些細なことはあるが、Engels: Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft 第三節の翻譯「科學的社會主義と唯物史觀」中に不審に思はるゝ點がある。即ち本書三三二頁に「資本家的生産方法は次第々々に人口の大多數を無産者と化すると同時に、それは又、(社會を)自身の没落の刑罰の下に件の變革を成就せしむべく強制する所の、その力を作り出す。」と云ふ所の譯者の補註たる「社會それ自身の」と云ふは誤解を招く恐れはないだらうか。勿論博士の意味は資本主義的社會の事を意味して居るのであらうが、若しそれなら寧ろ註をつけたい方がよくなるからうか。序に原文及英譯を左に引用して置かう。

Indem die kapitalistische Produktionsweise mehr und

mehr die grosse Mehrzahl der Bevölkerung in Proletariat verwandelt, schafft sie die Macht, die diese Umwälzung, bei Strafe des Untergangs, zu vollziehen genötigt ist. (Vorwärts Anf. S. 48)

Whilst the capitalist mode of production more and more completely transforms the great majority of the population into proletarians, it creates the power which, under penalty of its own destruction, is forced to accomplish this revolution. (Kerr ed. p. 126 f.)

英譯に依れば資本的生産方法でなければならぬ。斯の如きは往々にして發見するところであるが、譯文の正確の爲めには、行文の難澁なるをも顧みない博士の譯文であるから、敢て指摘した迄である。特に博士の寛恕を乞ふ。

前號(第十五卷)目次(大正十年九月號)

論 說

英國國會制度の起源(下)

占部百太郎

基督教會と徴利問題(三)

高橋誠一郎

リカルドオの通貨論(二)

小泉 信三

雜 錄

千九百二十一年緊急關稅法制に就て(其一)

水野 智彦

經濟史研究に就いて(三)

野村兼太郎

社會思想家としてのウヰリアム・モリス(三)

加田 哲二

十九世紀初期に於ける英國都市生活の一面(二)

奥井復太郎

利子説明の基礎に關するボエム・ハヴェルクとクラークとの論争(下)

金原賢之助

新刊紹介

無産階級獨裁とソビエト制度 Hermann Paul, Aufgabe und Methode der Geschichtswissenschaften.

小泉 信三

野村兼太郎著「改版經濟的文化と哲學」

野村兼太郎

鼓常良譯「文化の諸相と其進路」

加田 哲二

慶應義塾大學經濟思潮講演會

園 乾治

●一冊定價金五拾錢  
●半年分金貳圓九拾錢  
●一年分金五圓四拾錢  
郵税金壹圓五厘 稅 共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛  
●營業に關する用件は發賣元宛  
●原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十年九月三十日印刷納本  
大正十年十月一日發行 每月一回一日發行

三田學會雜誌 禁轉載  
第五十卷 第十號  
編輯者 江田 範 保  
發行所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地  
印刷者 金子 鐵 五 郎  
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子 活 版 所

發賣元 國文堂書店  
東京市芝區三田貳丁目壹番地  
電話高輪一三七番  
振替東京四六九九番  
●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾內 理財學會